種の絶滅は気候変動のせいでは無かったことをデータで確認

杉 山　大 志　（すぎやま　たいし）一般財団法人キヤノングローバル戦略研究所 研究主幹

「気候変動によって多くの生物が絶滅している」という印象が広く流布されている。しかし、これまでのところ、種の絶滅の主な原因は生息地の喪失などであり、気候変動では無かったことは、生態学においては常識となっている。

今回紹介する論文は、そのことをデータではっきりと示したものだ。

米国アリゾナ大学などの研究者は、英国王立学会に掲載した最新の論文で、IUCN（国際自然保護連合）のデータベースを用いて、過去 500 年間に確認された約 900 種の絶滅の理由を体系的に分析した[*1]。

https://royalsocietypublishing.org/rspb/article/292/2057/20251717/234788/Unpacking-the-extinction-crisis-rates-patterns-and

絶滅原因は時代と場所によって大きく異なってきたことが示されている。
論文にある下図は、絶滅原因の変遷を時系列で示したものである。上半分の（a）は 1500 年以来、100 年ごとに見たものである。下半分の（b）は、1800 年以降を 10 年ごとに見たものである。

まず上半分の（a）を見てみよう。
これを見ると、1500 年代では、侵入種（invasive species）が絶滅の主因であったことがわかる。人間の移動とともに持ち込まれたネズミや捕食動物、病原体が、特に島嶼の固有種に壊滅的な影響を与えた。

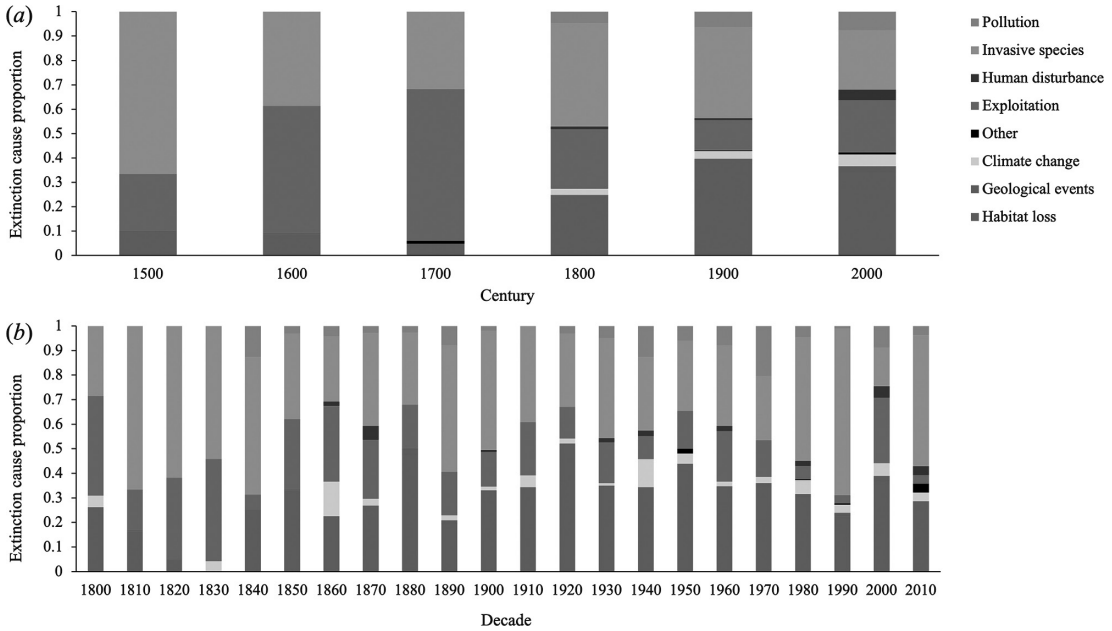

図 5